

浄土へ至らず

仲井和奏

さようなら　またあした

小さな嘘がついてくる

一歩進めば一歩と少し　ついてくる

嘘を許していた

わたしが嘘だと知っていた

幼い過去

本当のことなんて　わたしが生まれる前に

ついててしまったのだと

ついでに知り得なかった

そのきれいな刃物　傷をつけていくこと

どれもきたなかった

目を覆ったまま逃げた

守りたかった

誰も守れなかった　あたたかいひとりぼっち

愚者り

土砂り

音が隠していく

どこまでも暗い景色が映る波

底へ身を委ねた

心臓を砕く痛みも

脳を撫でる苦しみもない

ああ 救いだ

その夜は 全てが見えた

無数の指がわたしをくった

温い絹が

やがて包んだあなたを運んでゆく

見知らぬわたしも手招いて

極彩色を連れていった

口先で何も触れなくていい

指先はわたしのためだけに

だれかの刃物も

もうだれもわたしをわからなくていい

わたしもあなたをわからなくていい

そんな海が夢だった もうどこにもいない

目から滲んだいのちのと混ざり合っていく

わたしたちがいるばかり

寒い肌 が もう 不安なの！

肺を満たした苦しさが砂に溶けてすくえない

服についた砂だけが次のわたしたちにとけていく

ありがとう、おはよう。